巻頭言

情報社会の生態学

副会長　長尾　眞

情報社会の生態学ということをいい出してから3年になる．今日，情報は社会のすみずみにまで行きわたるようになり，情報は人それぞれによりそれぞれの仕方で活用され，また消費されると共に，種々の影響を社会と個人に与えるようになってきた．従って，情報・情報技術の社会における実態とその影響をよく観察し，情報と人間との相互作用，相互関連性について考えることが必要である．すなわち情報社会というものに対する生態学的研究が今日必要とされているというわけである．これを「情報社会の生態学」と名づけ，いくつかの所でその試みを示してきた．

情報の代表的な表現媒体は言語であるが，音や図形・画像，更には動作などによっても行われている．かつては，印刷物に固定された情報以外はすべてその場で消滅してしまうものであったが，電子技術・計算機技術によって，各種の情報が記憶され，処理され，種々の形に変換されて利用されるようになってきた．情報爆発という言葉が示すように，情報表現技術によって膨大な情報が利用できるようになってきているが，それに従って，一人の人間にとって必要な情報の割合が極端に小さくなり，真に有効な情報の取得が困難となってきている．

一方ではマルチメディア社会の到来ということがやかましくいわれるようになってきている．しかし，これが人々の社会生活を豊かにし，健全な社会の発展に貢献するものであるかどうかとなると，はなはだあやしいといわざるを得ない．社会のモラルを低下させることだけに寄与することのないよう祈らざるをえない．科学技術は社会を発展させる原動力であると広く信じられているが，このあたりで本当に望ましい社会の進歩発展とはどのようなことなのかを真検に検討することが必要であろう．これは物質面だけでなく，人間の精神面から行われる必要があるし，単に日本という狭い範囲でなく，世界全体を視野に入れて検討される必要がある．社会と情報，個人と情報との関係として検討すべき課題は多い．

今日この問題が特に我々技術者にとって重要になってきているのは，ハードウェア，ソフトウェアだけでなく，情報そのものを我々技術者が扱うようになってきているからである．社会の適切な発展ということに対する我々技術者の責任がますます大きくなってきていることを認識する必要があるだろう．